

ものでした。要するに、人間は先天的に身体つきが決まっているのではなく、置かれた環境によってどんなに変化する生き物だという事実を明らかにしたのです。これは、人種というのは変わり得ないものと断定して、ユダヤ人種の根絶を謳うナチス・ドイツに対抗する言説になり得るものでした。

このように、ボアズによって始められたアメリカ人類学は最初から政治的な意味合いを帯びたものだったのです。「イデオロギー性」をめぐる問題が、ボアズの時代からアメリカ人類学に潜在していたと言ひ換えてもいいでしょう。

## 人類学のホーリスム

ボアズが学生たちに強調したことのひとつは、あらゆるデータを集積して、社会をひとつのまとまりとしてホリスティック（全体的）に捉えることの重要性でした。このホーリスムはその後、アメリカの人類学における重要な手法となります。

一般的に考えれば、フィールドに入る前に十分な文献研究を行えば、現地調査で焦点を当てるべきトピックもより明確になるはずですが、たしかにそうなのですが、事前に細かく調べすぎるのも考えものです。そのせいでフィールドワーカーは自分が調べたいことだけを調べればよいと思うようになってしまうのです。そのようにしてポイントを絞って調査

研究を進めれば、特定の課題に関しては掘り下げることはできるでしょう。しかし、調査地の人間の「生」についての理解の深まりに欠ける可能性があります。

言い換えれば、現地で断片的な情報をどんなにたくさん集めても、必ずしも全体への理解が得られることにはならないのです。人類学者は、フィールドに暮らす人々の「生のあり方」を知れば知るほど、現地に入る前に得た知識がいかに不完全で現実から離れたものであるかに気づくのです。ボアズが言いたかったのは、社会をひとつのまとまりとして、ホリスティックに調査を進め、調査地の文化をまるごと理解することの大切さだったのです。

ホリスティックに物事を調べるといふこの研究手法は、現代の私たちにとっても役立ちます。何かを知るために特定のトピックのみを調べても、分かることは限られています。それでは狭い範囲でしか分かったことになりません。たとえば、何らかのトピックに関して、ある集団の特性について知りたいと思うなら、その集団が属している社会や文化全体にまで視野を広げてみると、より豊かな見通しが得られることとなります。

こうしたホリスティックな研究手法は、アメリカの「総合人類学」のアプローチに合致します。ボアズが提唱したとされる総合人類学の4分野とは、①自然人類学、②考古学、③社会・文化人類学、④言語人類学です。今日でもアメリカ国内で人類学を専攻すると、

この4分野を学ぶことが必須とされます。複数の学問の視点を学び、研究に取り入れることで、ホリスティックなアプローチをとることがアメリカの人類学の特徴なのです。

このようなボアズ人類学の基本的な姿勢には、ドイツの哲学者ヴィルヘルム・ディルタイの影響が見られます。ディルタイは、物事の個別事象の理解を目指す「精神科学」という人文学を提唱しました。個別事象を理解するには、それを成り立たせている「歴史性」に注目することが重要だというのが、精神科学の骨子です。

ディルタイを継承したボアズは、個々の文化は様々な歴史の偶然によってつくり出されており、普遍化や一般化をすることは不可能だと考えたのです。それぞれの文化を独立した個別のものとして捉え、各文化の変遷をめいめいに辿っていくボアズのアプローチは、「歴史個別主義」とも呼ばれます。

ボアズは、文化とは環境との関係や移住の経緯、隣接する文化からの借用など、歴史の積み重ねによって形成されるものと主張しました。ボアズにとって、文化とはひとつのまとまりとして見るべきものであり、文化の要素は他の要素との関係で理解されるべきものだったのです。

## 文化相対主義とは何か

ボアズによって提唱された人類学の重要なキーワードに、「文化相対主義」があります。文化相対主義とは、すべての文化には価値があり、そのすべてに敬意が払われるべきであるという考え方のことです。それはボアズ以降に、人類学という学問を支える世界観や心構えとして、アメリカを越えて世界に広がっていきました。

厳密に言えば、ボアズ自身が文化相対主義という用語を使ったわけではありません。ではなぜ、この考え方がボアズに由来すると言えるのでしょうか？

ボアズが最初に文化相対主義的な考えを打ち出したのは、1887年に発表した論文の中だったとされます。そこで彼は「文明とは絶対的な何かではなく、相対的なものである」と述べています。

ボアズは「未開文化」と「文明」を峻別し、文化は未開から文明へ進歩するという考えを手放さなかったため、この文章が文化相対主義の表明であるというのは、やや無理があるかもしれません。しかしボアズの後継者たちは彼のアイデアを踏まえ、文化相対主義の考えを熟成させていったのです。その意味で、文化相対主義の起点はボアズにあったのだと言えるでしょう。

人類学において実際に文化相対主義という用語を使い始めたのは、ボアズ門下のメルヴイル・ハースコヴィッツです（1948年の『人間とその作品』において）。ハースコヴィッツは

ポアズの「文明」相対主義を引き継ぎながら、未開と文明を問わず、あらゆる文化は対等だと主張しました。そして、文化の対等性と非絶対性のことを文化相対主義と位置づけました。

私の文化とあなたの文化が違うことは当たり前。でも、そこに優劣の差はまったくない。この考え方は、いまでこそストーンと腑に落ちるものでしょう。しかし、このような概念は第二次世界大戦前においては「常識はずれ」のものだったのです。

第二次世界大戦後、文化相対主義という言葉は一般にも広く用いられるようになります。文化相対主義の考え方はアメリカ人類学の根底に流れる理念として継承され、人類学だけでなく、グローバル化する現代世界においても共有されるようになったのです。前章で取り上げたレヴィ・ストロースの構造主義とともに、この文化相対主義は人類学が生み出した概念の中でも、特に世界に強い影響を与えたものでした。

## 「生のあり方」とは

ところで、文化相対主義の「文化」とはいったい何を指すのでしょうか？ 1章で触れたタイラーは、人類学についての文化とは「知識、信念、技術、道徳、法律、慣習など、社会の成員としての人間が身につけるあらゆる能力と習慣からなる複合的な全体」と定義

しました。これが学術的すぎるのであれば、文化とは *ways of life*、つまり生活様式や「生のあり方」だと言っても違和感はないでしょう。

むしろアメリカでは、文化と言えばポアズ派の用いる「生のあり方」のほうがしっくりくるのです。実際、今日のアメリカ人類学の教科書では、文化は「ある人々の集団の生のあり方」や「特定の人間社会に特徴的な生のあり方」であるという定義が用いられています。

アメリカの人類学は、自分たちの学問を「文化人類学」と規定しています。その意味で、文化の概念は特に重要なものであり、「生のあり方」こそがアメリカの人類学では研究の対象なのです。

文化を「生のあり方」だと言い始めたのは、ポアズ門下のルース・ベネディクトとマーガレット・ミードでした。1920年代後半から1930年代前半にかけて、彼女たちは「生のあり方」を取り上げることこそが人類学の目的だと表明しました。

ここでもまた興味深いのは、そのような文化の定義が、アメリカ固有の政治状況に連動しながら確立されていたという点です。アメリカの文化人類学は、常に社会的な背景と連動してきたのです。1930年代後半、プラグマティストであるジョン・デューイは共産主義やファシズムに対抗して、民主主義こそが自分たちが守るべき「生のあり方」だと

述べています。デュイイにとって民主主義とはたんなる政治制度ではなく、生きていくための方法そのものだったのです。アメリカの知識人層に浸透していったデュイイの捉え方とあいまって、ベネディクトやミードの「文化は生のあり方である」という考え方が広がったのだと言えるでしょう。

個々の生に意味と目的を与え、その人なりの生き方を肯定する。文化を「生のあり方」と定義すれば、生まれではなく育ちが、人種ではなく文化こそが人間の生き方を規定することになります。

こうした定義は第二次世界大戦前後の世界秩序の中で共産主義やファシズムに対抗し、それらを押し返すために、アメリカの人類学にとって大切なことだったのです。ボアズ以降に培われていったこのような文化観は、文化相対主義とセットとなって、アメリカという超大国を発展させ、維持する上でも重要だったのです。

以下では、ボアズが立ち上げたアメリカの人類学を引き継いで発展させた前述の2人の女性人類学者を取り上げてみたいと思います。

### ベネディクトの『文化の型』

1人目は、ベネディクトです。1887年にニューヨークで生まれた彼女は1909年にヴァッサー大学を卒業し、ニวยอร์กスクール・フォー・ソーシャル・リサーチで人類学に出会います。1921年からコロンビア大学の大学院に入学してボアズに師事し、1923年に『北米における守護霊の観念』という論文で博士号を取得しています。

彼女は1934年に『文化の型』を出版し、1936年にコロンビア大学の助教授に就任します。そして1946年には『菊と刀』を刊行し、2年後の1948年にコロンビア大学教授に任じられましたが、その2ヵ月後にニューヨークで急死しました。

ベネディクトの主著『文化の型』の内容を押さえておきましょう。彼女は『文化の型』で、文化人類学の目的は様々な文化を成り立たせているパターン(型)の探究だと述べてい



ルース・ベネディクト (提供: SPL/PPS 通信社)

ます。この本の中で、ベネディクトは3つの文化を比較検討しています。自らがフィールドワークを行ったニューメキシコのズニ(プエブロ)文化、ボアズがフィールドワークを実施したバンクーバー島のクワキウトル文化、イギリスの人類学者レオ・フォートチューンが実地調査をしたメラネシアのドブ島民の文化です。